

ワークショップ「考えるツールとしてのデータベース」開催

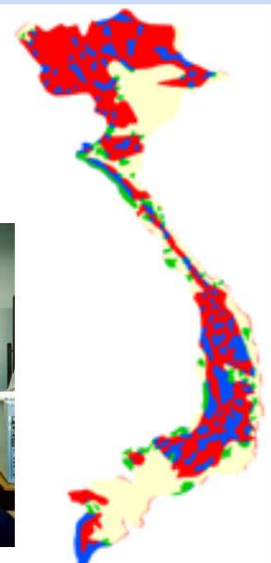
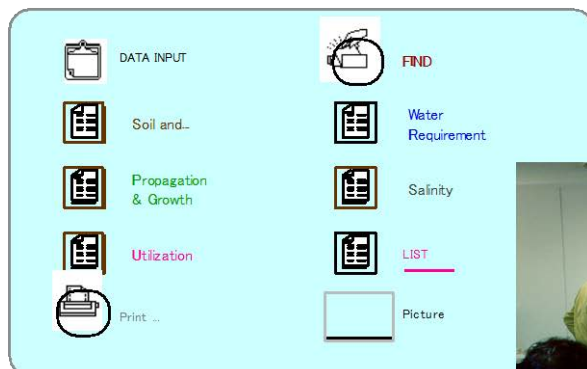
1997年7月に開催された国際耕種のワークショップ「根をデザインする」に続く第2弾として、2月20日に「考えるツールとしてのデータベース」と題して、データベースやGISに関するワークショップが開催された（「根をデザインする」については第12号参照）。今回は大学関係者、開発コンサルタント等から合計20人程度の参加者があった。今回のワークショップは大きく分けて2部構成で、前半では講義形式のさまざまな事例紹介を行い、後半は4つのグループに分かれて参加者が実際にコンピュータを使いながら検討・議論する、という形式だった。

前半の最初に、今回のワークショップ会場を提供して頂いた（株）アプライドナレッジの方からデータベースの現況についての紹介があった。それに引き続いて、国際耕種がこれまでにに関わり合ってきた各種データベースを数値型、検索型、地図型に分けて紹介した。ここでは特に「成長するデータベース」と題して、単純なデータベースからより使い易いデータベースへと進化する過程を詳細に説明した。また、前半の最後には、「ツールとしてのデータベース」の実例や今後の方向性に関する2～3の考え方を紹介した。

グループ別の検討会では、「データベース一般」「カード型データベース」「メッシュマップ」「GIS」の4グループに分かれて、参加者が実例を動かしたり、場合によっては改良を加えたりしながら議論出来ることを想定していた。しかしながら、参加者によって使用したソフトウェアに対する経験がまちまちだったこともあり、残念ながら想定していたような議論には至らなかった。

まとめの議論の中で、「考えるツール」ということが話題となった。「考えるツール」を大工さんの道具にたとえると、同じ工具箱から道具をとって使っても結果として出来上がるものは違う。使う人の技術が問題となる。「考えるツール」はまた、幾何の問題を解く際の補助線にたとえることもできる。結果を導き出すに当たって、あれこれ考える時にあると便利なものであり、その意味では試行錯誤のプロセスがわかるようなものが求められる。自分が試行錯誤したプロセスを再び見ることが出来るような画面があれば、それは「考えるツール」として極めて有用なものであるに違いない。データベースを「考えるツール」として使う場合、データを様々な切り口で表現したり、他のデータとの比較検討も試みる。こうした試行錯誤の中から結果を導き出そうとするものであり、データそのものから結果を導き出すものではない。今後さらにデータベースの構造や表現方法に検討を加え、考えるツールとして使うための工夫を続けて行きたい。

ARIDPLANT database MENU



ヴェトナム国における
森林面積の推移